2023年度 卒業制作

ルポルタージュ

「災害時の性暴力」を防ぐためには
～「埋もれた声 25年の真実～災害時の性暴力～」から辿る～

指導教官 高橋 恭子

早稲田大学政治経済学部政治学科

映像ジャーナリズム・高橋恭子ゼミ

4年 小倉 和真

概要

本稿は、2020年にNHKで放送されたドキュメンタリー番組「埋もれた声 25年の真実～災害時の性暴力～」に携わった制作者や出演者への取材をもとにしたルポルタージュだ。その実態を伝える関係者の活動やメディアの報道を深掘りし、将来的な「災害時の性暴力」との向き合い方を総括している。

今までの日本社会では、平時の性暴力さえもメディアに取り上げられることは少なかった。特に、「災害時の性暴力」は最近になって報じられるようになったのではなかろうか。そう感じた私は、その実態を大々的に発信した上記の番組を分析した。これを踏まえ、番組の出演者や制作者への取材を通じて、それぞれの本心に寄り添い、「災害時の性暴力」が社会やメディアにどのように位置付けられたのかを理解した。そこで、「災害時の性暴力」の実態が広く知れ渡るためには、メディアが今後どのような発信を心掛け、視聴者である市民はメディア報道をどのように受け止めるべきかを明らかにしようと考えた。

序章では、「災害時の性暴力」に関して初めて課題認識を持った記事をもとに、番組の存在を知った経緯を述べている。加えて、災害時と性暴力を別々に捉え、震災報道に取り組むメディア関係者の意見や性暴力と向き合う日本社会の変化を示している。第一章では、番組制作の中心を担った小原美和の話をもとに、放送日までの過程や周囲の反応などを記述している。なぜ阪神淡路大震災から約25年が経過した今になって放送されたのか、更には番組を企画するうえで何を工夫したのかについても詳細に書いている。第二章では、阪神淡路大震災当時から性暴力の実態を訴え続けてきた正井禮子取材し、彼女自身がバッシングからどのように立ち直って声を上げ、他の活動家の協力を得たのかを尋ねた。女性運動家としてメディアに出演する機会が多い彼女が、現在までメディアとどのように向き合ってきたのかも述べている。第三章では、番組に出演した証言者取材し、番組で取り上げられた「災害時の性暴力」に関連する各自の活動の詳細を書いている。第四章では東京都内から支援活動に取り組んだ女性、第五章では災害とジェンダー分野に関する研究を行う専門家への取材内容を記している。ここでは、メディアに限らず、社会学的研究やジェンダー教育、更には行政や団体が抱えている課題を明示している。

「災害時の性暴力」の実態は、現時点では世間一般に問題意識を持たれているとは言い難い。今回の研究では、社会全体として問題意識を持つための発信や行動、情報提供が重要だと明らかになった。最後に、取材内容に基づいた考察とともに、市民やメディアに求められる役割についてまとめている。